

国 指 定 史 跡
吾 妻 古 墳

-重要遺跡範囲確認調査概報 I -

2008.3

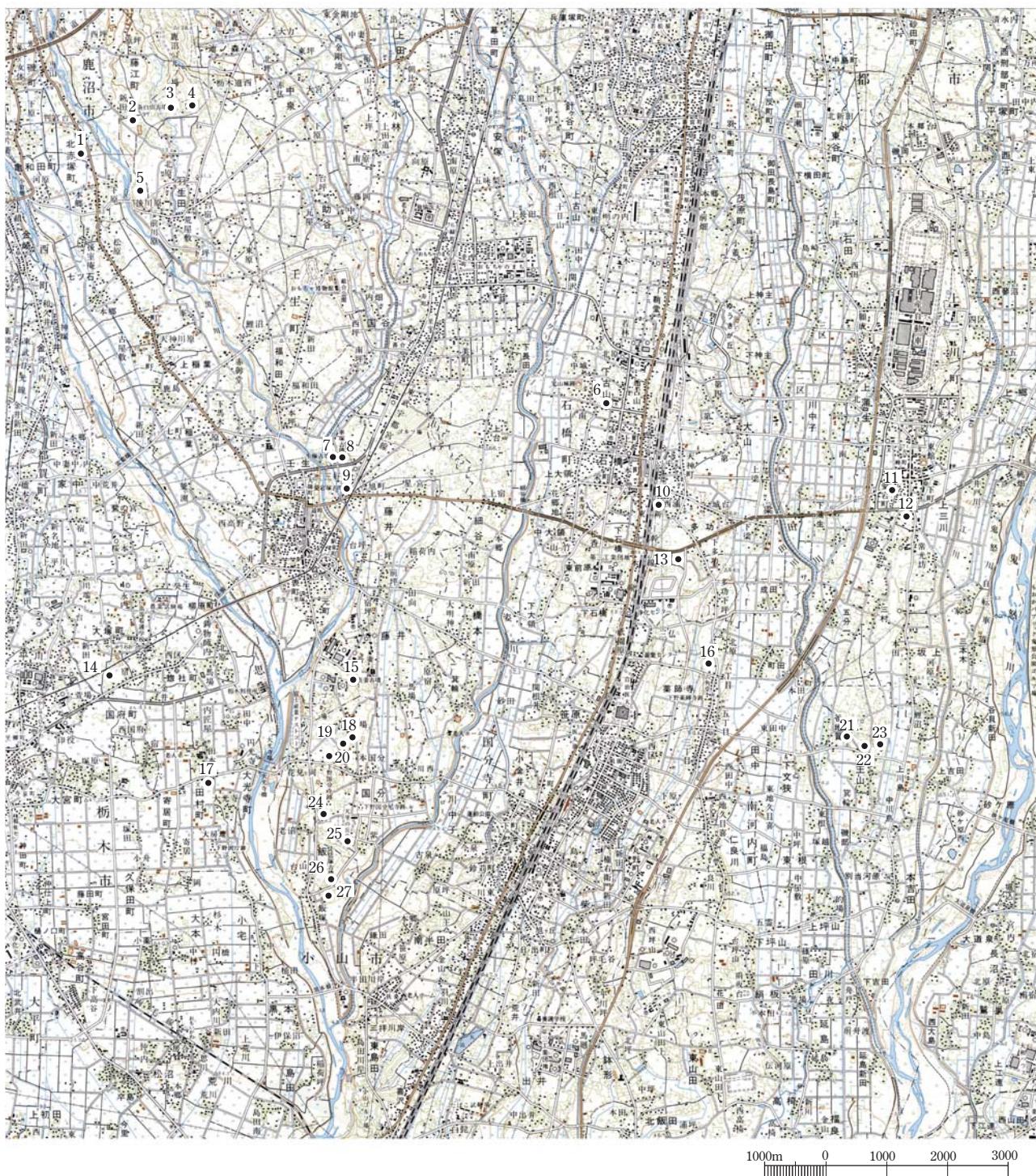
栃木県教育委員会
(財) とちぎ生涯学習文化財団

国 指 定 史 跡
吾 妻 古 墳

- 重要遺跡範囲確認調査概報 I -

2008. 3

栃木県教育委員会
(財)とちぎ生涯学習文化財団



- | | | | |
|----------|--------------|--------------|-------------|
| 1. 判官塚古墳 | 8. 車塚古墳 | 15. 吾妻古墳 | 22. 三王山39号墳 |
| 2. 桃花原古墳 | 9. 壬生愛宕塚古墳 | 16. 御鷺山古墳 | 23. 三王山古墳 |
| 3. 茶臼山古墳 | 10. 下石橋愛宕塚古墳 | 17. 丸山古墳 | 24. 甲塚古墳 |
| 4. 富士山古墳 | 11. 上三川愛宕塚古墳 | 18. 丸塚古墳 | 25. オトカ塚古墳 |
| 5. 長塚古墳 | 12. 兜塚古墳 | 19. 山王塚古墳 | 26. 琵琶塚古墳 |
| 6. 横塚古墳 | 13. 多功大塚山古墳 | 20. 国分寺愛宕塚古墳 | 27. 摩利支天塚古墳 |
| 7. 牛塚古墳 | 14. 岩家古墳 | 21. 星の宮古墳 | |

第1図 思川・黒川・姿川流域の主要後期古墳分布図（国分寺町教委2005を参考に作成）

序

下都賀郡壬生町から小山市にかけての黒川を望む台地上には、多くの古代の遺跡が所在しています。中でも、栃木市と壬生町にまたがる吾妻古墳は、栃木県の古墳時代を語る上で欠かせない代表的な古墳ですが、これまでに発掘調査が行われたことがなく、その詳しい内容は不明なところが多いものでした。

栃木県教育委員会では、吾妻古墳の範囲や遺構の保存状態等を解明するために、平成19年度から範囲確認調査を行うこととしました。

調査の結果、古墳の墳丘や堀についての、多くの貴重な所見を得ることができました。

本概報はその途中経過をまとめたものです。本書が県民の皆様にとって郷土の歴史を理解する一助になるとともに、各方面において広くご活用いただければ幸いです。

この度の調査にあたり御指導、御協力をいただきました文化庁、栃木市教育委員会、壬生町教育委員会等の関係機関、並びに地元地権者をはじめとする関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成20年3月

栃木県教育委員会
教育長 平間 幸男

例言

1. 本書は、栃木県栃木市大光寺町、下都賀郡壬生町藤井に所在する、吾妻古墳（国指定史跡）を対象として実施した、平成19年度重要遺跡範囲確認調査の概要報告書である。
2. 調査は、栃木県教育委員会が、財団法人とちぎ生涯学習文化財団に委託して実施した。
3. 調査は、以下の担当者が実施した。

調査部 調査部長 川原由典 調査部長補佐兼資料整理担当 中山晋
調査第一担当 副主幹 藤田典夫 主査 中村享史 主査 宮田宣浩

4. 本文の執筆、編集は中村が行った。
5. 表土除去は、有限会社大藤工業に、基準杭建植は中央航業株式会社に委託した。
6. 遺跡の写真撮影は、中村、宮田が、遺物の写真撮影は中村が行った。
7. 調査には次の諸機関及び諸氏に御協力、御指導を賜った。記して謝意を表したい。

文化庁、栃木市教育委員会、壬生町教育委員会、トヨタ自動車株式会社、太田茂、横山忠一郎、海老原郁雄、酒寄雅志

8. 本遺跡の出土遺物、実測図及び図版等は、財団法人とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センターで保管している。
9. 発掘調査、資料整理に従事した作業員は次の通りである。

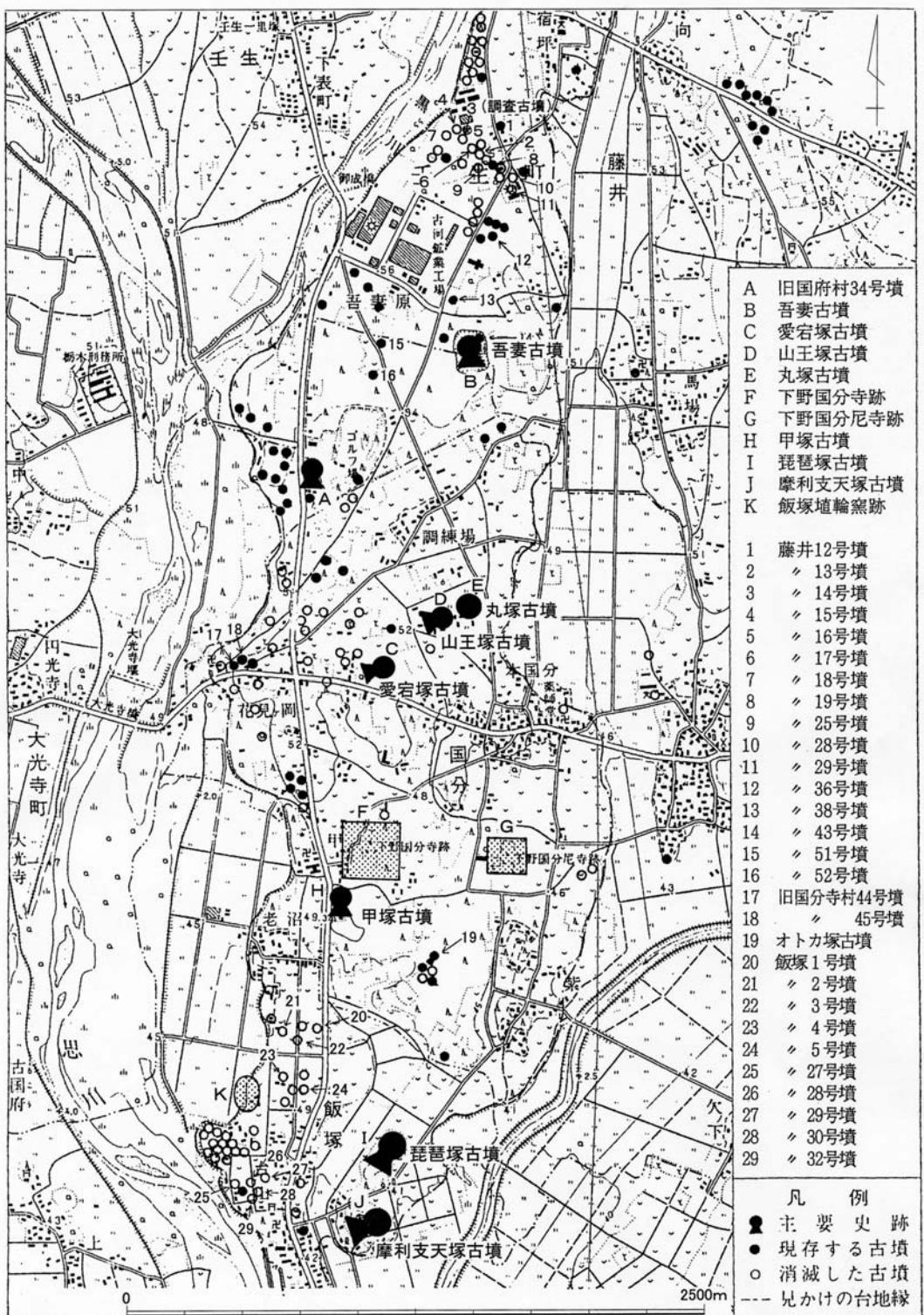
天野崇弘、五十嵐裕子、大久保保江、菊元美弥子、黒崎喜好、黒崎しづ子、児玉祐美子、佐藤ふじ子、篠原八重、鈴木俊江、鈴木実花、長秀紀、土田和夫、寺崎智恵美、橋本一枝、橋本泰二、林勝彦、福田昌子、森下勝、吉羽里美、若林泉

凡例

1. 遺跡の略号はMB-AZである。
2. 墳丘測量図の座標は世界測地系に基づく。
3. 標高は海拔標高である。
4. 縮尺は図面脇に記した。
5. 図示した方位は座標北である。
6. 本概報での吾妻古墳の計測値は壬生町史に従ったが、将来変更される可能性がある。

目 次

序	i	(3) 付近の主な遺跡	2
例言	i	(4) 研究小史	5
凡例	i	3. 調査の所見	9
1. 調査に至る経緯と経過	1	(1) 各トレンチの所見	9
(1) 調査に至る経緯	1	(2) 出土遺物	12
(2) 調査方法と経過	1	4. まとめ	13
2. 遺跡の環境と研究小史	1	(1) 墳形	13
(1) 地理的環境	2	(2) 遺物	14
(2) 吾妻古墳の現状	2		



第2図 周辺古墳分布図 (小森・太田・津布楽 1987 より転載)

1. 調査に至る経緯と経過

(1) 調査に至る経緯

吾妻古墳は、栃木県における古墳時代後期の代表的古墳であることから昭和45年7月22日付けて国指定史跡となり保護が図られたが、近年、史跡周辺に開発が及ぶようになってきているため、範囲確認調査を実施し、史跡を保存するために必要な範囲が保護されているかを確認することとした。これとともに古墳の外形確認調査を行って、史跡の歴史的価値をより一層明らかにし、今後の史跡の保護と積極的な活用を進めるための基礎資料を得ることとした。計画はおよそ3年計画で、平成19年度をその初年次とした。

調査に先だって、古墳が所在する栃木市教育委員会、壬生町教育委員会及び市境が近接する下野市教育委員会に対して調査計画の説明を行い、協力を要請した。なお、今回の調査は、国指定史跡地内での発掘調査であることから、事前に文化庁長官から現状変更の許可を受けた。

(2) 調査方法と経過

次のことを目的としてトレンチを設定した。

1. 周堀外の遺構（周堤帯、二重目の周堀）の有無
2. 墳形（墳端）の確定
3. 墳丘表面の観察（葺石、埴輪の有無）
4. 周堀内の観察（覆土の状況、深さ）

調査に当たっては、測量図の提供を壬生町教育委員会より受けた。測量図は、壬生町史編さん時に作成したものである。その時の測量杭は滅失していたので、新たに墳丘主軸に沿った測量杭を建植し、それを使用してトレンチを設定することとした。測量図は世界測地系適用以前のものなので、測量図上にも新たに世界測地系の座標を落とした。

平成19年度は前方部を中心に調査を行った。

現地での調査は10月から開始した。最初にトレンチを設定するために、危険な立木の伐採、下草刈りを行った。立木は運搬できる長さに切りそろえ、指定地内にまとめて置いた。

各トレンチは幅1～2mに設定した。周堀外は、表面観察の段階で遺構の存在の可能性が薄いと判断できたこと、7トレンチの調査の結果、遺構が認められなかったことから、1～6トレンチの周堀外は、重機を利用して掘削を行った。その結果、当初の判断通り、周堀外では各トレンチとも周堀等の古墳時代の施設は確認できなかった。墳丘と周堀内は人力で掘削を行った。周堀内は予想に反して、覆土が薄く、短期間で底面まで掘り下げる事ができた。墳丘上は墳丘第一段（基壇）に盛土が施されていることが判明し、一部旧表土面まで断ち割りを行った。第一段平坦面上では、墳丘第二段裾付近からの埴輪の出土が最も多い。墳丘上では斜面、頂上の平坦面共に埴輪が出土したので、それらの記録を行った。

これらの成果は県民に速報することとし、平成20年1月20日（日）に現地説明会を行った。見学者は250名に達し、盛況であった。

調査終了後、トレンチの埋め戻しを行い、概報作成を行った。

2. 遺跡の環境と研究小史

吾妻古墳については、墳丘の形状や主体部のあり方等をめぐって、これまで盛んに議論されてきた。以下にその概要を列記する。

(1) 地理的環境

吾妻古墳は、下都賀郡壬生町大字藤井字吾妻1051-2・栃木市大光寺町字吾妻原2969に所在し、黒川と思川の合流する地点、その左岸付近の国谷台地中位面に位置する。この



写真1 1 トレンチ作業状況（南から）



写真2 現地説明会実施状況（南から）

台地は北は壬生町安塚付近から、南は小山市飯塚付近を占めている。藤井付近の標高は約55mである。西側は江川、黒川、思川に面して崖面を形成し、東側は姿川に画されている。古墳が所在する台地面は、西側が河川に直接面しているが、東側の姿川との間には谷1条が入る。この谷は北は壬生町星ノ宮の巖島神社付近から始まり、南は下野市紫付近の姿川の低地に及ぶ。その南端には摩利支天塚・琵琶塚古墳が位置している。吾妻古墳はこの谷の中央付近の西側縁辺に所在している。古墳付近はほぼ平坦であるものの、前方部南東隅角付近からこの谷に合流する小支谷が伸びている。吾妻古墳を直接臨めるのは、この小支谷だけである。黒川等の大河川からは、吾妻古墳は直接には臨めない位置にある。

参考文献

阿久津純 1984 「I 地形分類図」『土地分類基本調査』 栃木県企画部土地対策課

（2）吾妻古墳の現状

古墳はコナラ等の落葉広葉樹が主体を占める平地林の中にある。赤松も混じるがそのほとんどが立枯れしている。周堀外北東側や南側には杉が植樹されている。周辺には工場や集積場が作られ、開発が進みつつあるものの、墳丘や周堀の遺存状況は良好である。

墳丘は二段に作られている。一段目は低く幅広いので、基壇と呼ばれている。後円部墳丘第二段には北側斜面に山道に伴う崩れが見られるものの、墳頂には掘削に伴うような窪みは見られず、主体部の存在を示すような痕跡は認められない。前方部墳丘第二段は、前端部分が窪んでおり、後述の石室の存在が予想されるが、完全に埋没しており、見ることはできない。石材を取り出したときに押し出された土砂の高まりが前方部墳丘前端第一段の平坦面から斜面にかけて見られる。また、後円部墳丘第一段平坦面東側には、藤井43号墳とされる直径5m程の高まりが見られる。墳丘の上に別の古墳が存在するとみなされているのは不合理であるが、代わりに、造出や中島と想定することも可能である。くびれ部東側の墳丘第一段斜面と周堀外縁には土手状の高まりが周堀の内外をつなぐかのように突き出しており、陸橋若しくは造出と考えられている。

周堀外縁の西側は墳丘に沿って前方後円形を描くが、東側はくびれ部南側付近が最もふくらんでおり、左右対称にはならない。周堀西側外縁には低い土手状の高まりが見られる。周堀東側外縁にはこれに対応する高まりは認められない。周堤帯とも考えられるが、後円部付近から北側に向かって、古墳の外縁に沿わないで北側に直線的に伸びているので、古墳の施設ではない可能性もある。後円部西側外縁付近には39号墳がその高まりに近接して存在する。前方部西側は高まりの西縁に舗装道路が作られている。

古墳に入るための小道は、後円部北側周堀外から周堀内に降りて墳丘上へ登るように小道が北西部から南に伸びている。古墳南東部には隅角やや北側から周堀内に降りるように伸びている。この小道は東側は指定地外まで伸びている。

周堀底面は北部と西部が高く、南部と東部が低い。降雨時には低い部分に水たまりができるものの、底面の高低差は60～70cmほどで、この規模の古墳としては小さい。

（3）付近の主な遺跡

吾妻古墳は古墳時代後期の大型前方後円墳である。同じような時期と性格を有する古墳は、鹿沼市南部、壬生町、下野市、小山市北部にかけての、思川と田川の流域に集中して存在する。県内には大型古墳が複数存在する地域はみられるが、これほど密集する地域は他に存在しない。

この地域の大型古墳のうち最初のものは、吾妻古墳の約3.5km南に位置する小山市摩利支天塚古墳（墳丘長120.5m）（岩崎・森田・富永・稻葉・鈴木1983）・琵琶塚古墳（123.1m）（岩崎・三沢・三沢1994）である。これ以前の大型古墳は、約11.5～12.5km北東に位置する、5世紀前半に築造された宇都宮市 笹塚古墳（辰巳1976）、

5世紀中葉に築造された塚山古墳（常川・石川・熊倉 1979、石部 1990、石部・齋藤 1991、石部他 1995）である。5世紀中葉から後葉にかけて塚山古墳群が形成された後に、摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳が築造されたと考えられている。摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳はいわゆる基壇を持たず、埴輪も塚山古墳の特徴を残しているので、前代からの系譜を引き継いでいると考えられる。このことから、首長権が宇都宮南部からこの地域へ移動したと想定されている。吾妻古墳も含めて思川・田川地域の大型古墳は摩利支天塚古墳・琵琶塚古墳以降に築造されたと考えられている。

吾妻古墳と同様の墳丘第一段平坦面を有する前方後円墳には、約 10 km 北に壬生町茶臼山古墳（91 m）・長塚古墳（77 m）（君島 2002）、約 3 km 北に愛宕塚古墳（78 m）（君島 2005）・牛塚古墳（60 m）（君島 1993）・約 1～2 km 南に下野市山王塚古墳（90 m）（小森・黒田 1988、1989、1990）・国分寺愛宕塚古墳（78.7 m）（山越 1979）・甲塚古墳（66 m）（秋本・大橋・水沼 1989、国分寺町教委 2005）、約 6 km 北東に横塚古墳（70 m）（岩淵・田代 1984）・約 6 km 東に御鷺山古墳（85 m）（山ノ井・水沼 1992）・約 8.5 km 東に三王山古墳（80.5 m）（水沼 1992）がある。

この地域以外では、約 13 km 北に鹿沼市下台原古墳（73 m）（内山 1985）、約 16 km 東に真岡市八木岡瓢箪塚古墳（111.1 m）（山越 1976、秋元 2007）、約 31～2 km 南西に足利市正善寺古墳（103 m）（前澤・市橋・柏瀬・足立 1989、前澤・市橋・柏瀬 1990）・永宝寺古墳（66 m）（斎藤 2002、2004）がある。

吾妻古墳の周囲には群集墳の藤井古墳群（大和久 1967、稲葉・中山 1983、木村 1988、山ノ井 1990、君島 2001）がある。藤井古墳群では 83 基の古墳が確認されており、吾妻古墳はその中で 42 号墳と名付けられている。発掘



第3図 吾妻古墳周辺地形図 (S = 1 : 5,000)

調査は第1表のように行われている。それらの調査に 第1表 藤井古墳群調査歴

よると、墳丘は円墳が多数を占め、埴輪を持つものもある。内部主体には竪穴式小石室や横穴式石室が採用されている。家型石棺の出土も伝えられるが不明確である。横穴式石室は玄室が胴張り形で玄門を有し、両袖型である。周溝から続く溝状の墓道を持つものが多い。中には石組みの前庭部を持つものもある。

藤井古墳群の南には飯塚古墳群（鈴木1999、2001）が

調査年	調査者	調査古墳
1893	野寺茂平	42号墳(吾妻古墳)石室内
1964～66	大和久震平	13～19・25・28～30・36・38号墳
1980	中山晋	44・45号墳
1987	木村等	51・52号墳
1990	大川清	78・79号墳
1991	君島利行	36号墳
1996	君島利行	46号墳
1999	君島利行	38号墳

近接する。秋元陽光・大橋泰夫はこれらを一体のものととらえている。藤井古墳群に比べると、鈴杏葉等を出土した竪穴系埋葬施設を持つ飯塚31号墳等に古い様相が認められ、その形成は藤井古墳群より早くはじまると考えられる。飯塚27号墳はくびれの弱い前方後円墳の前方部前端に主体部を有し、吾妻古墳と類似した形状である。横穴式石室は玄門を持たず、玄室と羨道の区別が不明瞭なものが多く、竪穴系横口式石室に類似し、藤井古墳群の横穴式石室と構造が異なったものが多数を占める。藤井古墳群と飯塚古墳群の間にはオトカ塚古墳（39 m）（山口・木村2007）がある。飯塚27号墳同様、前方部前端に主体部を有する点が吾妻古墳と共に通するが、前方部が短い、帆立貝形である点は、前述の甲塚古墳に類似する。これらの群集墳は6世紀後半から7世紀前半にかけて形成されたと考えられている。

古墳以外では周辺には吾妻遺跡（吉岡・矢野1989、株式会社光伸1992、君島1993）がある。吾妻遺跡は奈良・平安時代の集落を主体とした遺跡であるが、近年C地点では古墳時代前期の竪穴住居跡が発見され、吾妻古墳築造以前の集落の様相が確認できた。谷を挟んだ東側の台地上には藤井馬場遺跡がある。古墳時代前期・中期、平安時代の土師器が採集されており、集落を形成していたと考えられる。

参考文献

- 秋元陽光 2007 「栃木県の前方後円墳ノート4－鬼怒川以東の前方後円墳－」『栃木県考古学会誌』第28集 栃木県考古学会
- 秋元陽光・大橋泰夫・水沼良浩 1989 「国分寺町甲塚古墳調査報告」『栃木県考古学会誌』第11集 栃木県考古学会
- 石部正志 1990 「塙山古墳（第一次調査概要）」『宇都宮市文化財年報平成元年度』第6号 宇都宮市教育委員会
- 石部正志・齋藤恒夫 1991 「塙山古墳（第二次・三次調査概要）」『宇都宮市文化財年報』第7号 宇都宮市教育委員会
- 石部正志他 1995 「塙山古墳外形確認調査報告」『峰考古』第9号 宇都宮大学考古学会
- 稻葉輝雄・中山晋 1983 『栃木県壬生町 藤井古墳群発掘調査報告書－44・45号古墳－』壬生町埋蔵文化財報告書第3集 壬生町教育委員会
- 岩崎卓也・森田久男・富永則子・稻葉英男・鈴木一男 1983 『摩利支天塙古墳・環境整備事業に伴う確認調査報告書』小山市文化財調査報告第14集 小山市教育委員会
- 岩崎卓也・三沢正善・三沢京子 1994 『琵琶塙古墳発掘調査報告書』小山市文化財調査報告第30集 小山市教育委員会
- 岩淵一夫・田代隆 1984 「横塙古墳」『石橋町史 第一巻 史料編（上）』石橋町史編さん委員会
- 内山敏行 1985 「下台原古墳」『下野考古学』7 下野考古学研究会
- 大和久震平 1967 『藤井古墳群発掘調査報告書』壬生町埋蔵文化財報告書第1冊 壬生町教育委員会
- 大和久震平 1972 「第五章古墳文化 第一節概観 一墳形（一）前方後円墳・第二節古墳の分布と主要古墳 四姿川・思川流域 吾妻岩屋古墳」大和久震平・塙静夫『栃木県の考古学』吉川弘文館
- 株式会社光伸 1992 『栃木県壬生町 吾妻遺跡B地点』壬生町埋蔵文化財報告書第12冊 壬生町教育委員会
- 君島利行 1993 「吾妻遺跡B地点」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 平成3年度』栃木県埋蔵文化財調査報告第129集 栃木県教育委員会
- 君島利行 1993 「牛塙古墳」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報 平成3年度』栃木県埋蔵文化財調査報告第129集 栃木県教育委員会
- 君島利行 2001 『栃木県壬生町 藤井古墳群－壬生町埋蔵文化財調査報告書第1集復刊－』藤井34号・36号・38号・46号墳－』壬生町埋蔵文化財調査報告書第17集 壬生町教育委員会
- 君島利行 2002 『栃木県壬生町 長塙古墳』壬生町埋蔵文化財調査報告書第18集 壬生町教育委員会
- 君島利行 2005 『国指定史跡 愛宕塙古墳－測量調査及び表採資料報告書－』壬生町埋蔵文化財調査報告書第20集 壬生町教育委員会
- 木村等 1988 『藤井51・52号墳発掘調査概報』栃木市文化財調査報告第3集 栃木市教育委員会
- 国分寺町教育委員会 2005 『栃木県国分寺町 甲塚古墳－平成16年度規模確認調査－』国分寺町教育委員会

- 小森紀男・太田晴久・津布樂一樹 1987 「旧国府村34号墳墳丘測量調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第1号（昭和61年度） 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 小森紀男・黒田理史 1988 「国分寺町山王塚古墳第1次発掘調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第2号（昭和62年度） 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 小森紀男・黒田理史 1989 「国分寺町山王塚古墳第2次発掘調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第3号（昭和63年度） 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 小森紀男・黒田理史 1990 「国分寺町山王塚古墳第3次発掘調査報告」『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報』第4号（平成元年度） 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館
- 斎藤和行 2002 「永宝寺古墳第1次発掘調査」『平成12年度文化財保護年報』足利市埋蔵文化財調査報告第46集 足利市教育委員会
- 斎藤和行 2004 「永宝寺古墳第2次発掘調査」『平成14年度文化財保護年報』足利市埋蔵文化財調査報告第50集 足利市教育委員会
- 鈴木一男 1999 『飯塚古墳群III—遺構編—』小山市埋蔵文化財報告第44集 小山市教育委員会
- 鈴木一男 2001 『飯塚古墳群III—遺物編—』小山市埋蔵文化財報告第44集 小山市教育委員会
- 辰巳四郎 1976 「笹塚古墳」『栃木県史 資料編考古一』 栃木県史編さん委員会
- 常川秀夫・石川均・熊倉直子 1979 『塚山古墳群』栃木県埋蔵文化財調査報告第32集 栃木県教育委員会
- 前澤輝政・市橋一郎・柏瀬順一・足立佳代 1989 「正善寺古墳第1次発掘調査」『昭和63年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第20集 足利市遺跡調査団・足利市教育委員会
- 前澤輝政・市橋一郎・柏瀬順一 1990 「正善寺古墳第2次発掘調査」『平成元年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市埋蔵文化財調査報告第22集 足利市教育委員会
- 水沼良浩 1992 「三王山古墳」『南河内町史 史料編1考古』 南河内町史編さん委員会
- 壬生町教育委員会 2001 『壬生町遺跡分布調査報告』壬生町埋蔵文化財調査報告書第16集 壬生町教育委員会
- 森田久男 1979 「飯塚埴輪窯跡」『栃木県史 資料編考古二』 栃木県史編さん委員会
- 山口耕一・木村友則 2007 『オトカ塚古墳』下野市埋蔵文化財調査報告第2集 下野市教育委員会
- 山越茂 1976 「瓢箪塚古墳」『栃木県史 資料編考古一』 栃木県史編さん委員会
- 山越茂 1979 「愛宕神社古墳」『栃木県史 資料編考古二』 栃木県史編さん委員会
- 山ノ井清人 1987 「吾妻古墳」『壬生町史 資料編 原始古代・中世』 壬生町史編さん委員会
- 山ノ井清人 1990 「藤井古墳群」『壬生町史 資料編 原始古代・中世 補遺』 壬生町史編さん委員会
- 山ノ井清人・水沼良浩 1992 「御鷲山古墳」『南河内町史 史料編1考古』 南河内町史編さん委員会
- 吉岡秀範・矢野淳一 1989 『栃木県壬生町 吾妻遺跡』日本窯業史研究所報告第26冊 日本窯業史研究所

（4）研究小史

吾妻古墳の存在は江戸時代から知られていたようで、石室が露出していたと思われる。『壬生町領史略』に墳丘と石室の記述が見られる（碧山1850）。明治時代初期の『下野國古墳図誌』には、明治初年藩主鳥居忠文が赤見堂の庭地に石材を移設したこと、1893（明治26）年10月野寺茂平が石室内を発掘し、懸仮2枚と古銭数枚が発見されたことが記述されている（著者不明1860s）。石室は長さが六尺（1.81m）、幅・高さが三尺五寸（1.06m）と記されている。現在石室の露出が見られないことから、これ以後に埋没が進んだと考えられる。これらの石材の一部は現在、壬生町歴史

民俗資料館敷地内に保管されている。

第2表 吾妻古墳計測値（単位：m）

計測箇所	文献 大和久 (1972)	山越(栃 木県史 1979)	山ノ井 (壬生 町史 1987)	稻垣 (1997) ・斎藤 (2000)
周堀外縁長	180	165.1		165
墳丘第一段下端長		115	117	134
墳丘第一段平坦面長		74.3	72.4	
墳丘第一段平坦面後円部径		65.5	66	
墳丘第一段平坦面前方部幅			62	
墳丘第一段平坦面括れ部幅				
墳丘第二段下端長	90	84.7	85.6	
墳丘第二段後円部径	45	41.7	44	
墳丘第二段前方部幅	45	41.1	42.2	
墳丘第二段括れ部幅				28
		全長		

広さを増したものに変化するとし、吾妻古墳をその最も完成した形と位置づけた。石室についてはその編年観から、前方部前端の石室は新しく位置付け、後円部に別の石室が存在することを想定している（大和久 1972）。

このような認識のもとで、栃木県史編さん事業において、吾妻古墳の測量が行われた。この時に詳細な実測図が公表され、埴輪の存在も初めて報告された（山越 1979）。

岩崎卓也・森田久男は吾妻古墳の埴輪が、2.5 km 南方に位置する小山市飯塚埴輪窯跡出土の埴輪にその特徴が類似することを指摘している（岩崎・森田 1978）。

岩崎卓也は、6世紀の新興首長系列墳が、名代・子代あるいは部などの管掌者と結びつく可能性が高く、中期までとは違って、大和政権下の官人的性格が強いとし、基壇を持つ古墳は同族系譜で結び合っていた首長である可能性が高いとしている（岩崎 1984）。

1986年に宇都宮市で行われた古代史サマーセミナーで古墳の編年案が提示された（秋元・大橋 1986）。吾妻古墳については秋元陽光・大橋泰夫が新たな見解を示している。秋元・大橋は、思川・田川地域を9の単位地域に分けた。単位地域とは、古墳が多く存在する地域の中に含まれるより小さな古墳群のまとまりを指す。その中で吾妻古墳を、同じ台地上にあることから、摩利支天塚・琵琶塚古墳と同系列上に位置付けた。そして、前方部が基壇を持つ古墳の中で最も未発達であること、普通円筒埴輪の存在、飯塚古墳群における類似した墳形の年代推定から、吾妻古墳に対して、琵琶塚古墳に後続する年代を与えており、従来の年代観より遡らせている。それまで年代を下げる要因としていた石室についても、切石の発達度が年代を遡らせる要因にする必要がないとし、前方部だけでなく後円部に未発見の石室があるとみるよりも、飯塚古墳群の類似した墳形の古墳の石室が前方部前端にのみ石室を有することから類推すると、前方部にのみ石室を有すると判断しても差し支えないと判断している。その上で基壇を持つことと前方部のみに石室を有することを特徴として持つ古墳を「下野型古墳」と命名し、それが首長連合・同盟関係の結果であり、吾妻古墳をその中で最古のものと位置付けている（秋元・大橋 1988）。

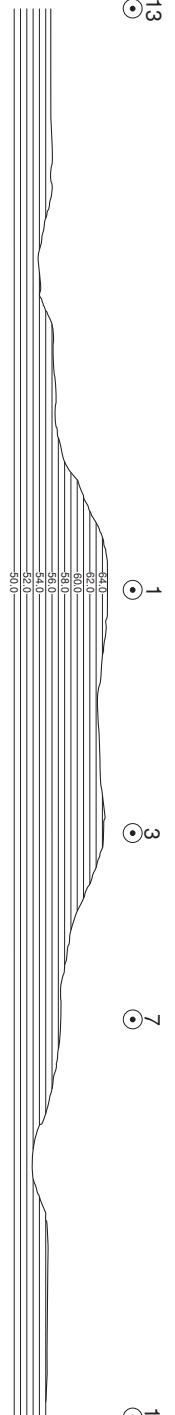
基壇の特異性を地域の独自性として位置付け、政治的背景を想定した点が画期的であったが、この結論は、大和久が基壇の完成形で最新としたものを、逆に基壇の祖形で最古と位置付けることになり、それまでの理解と大きく異なるものとなった。さらに大橋泰夫は切石石室を栃木県内の最高首長の採用する墓室として位置付け、次代まで続く田川・思川地域の卓越性を主張している（大橋 1990）。

下野型古墳の提唱に対しては、池上悟、上野恵司の批判がある。池上は栃木県の横穴式石室を検討する中で吾妻古墳の石室が前方部のみではなく、後円部にもある可能性を指摘している（池上 1988）。上野は、基壇に類似した墳形は群馬県にも存在するので、栃木県のみの特徴とは言えないとし、前方部の石室についても、池上の指摘のような後円部にもある可能性と、千葉県姫塚古墳や変則的古墳（常総型古墳）に主体部が前方部にのみある例を挙げて、栃木県だけの特徴ではないことを指摘し、下野型古墳の存在に疑念を呈している。年代については、墳形から6世紀後葉に近い中葉、石室から7世紀前葉に近い初頭と位置付けている。石室については秋元・大橋が出雲の石棺式石室との対比により古い要素とした玄門の刳り込みを、栃木県の横穴墓の検討によって新しい要素としており、全く逆の結論に至っている（上野 1992）。結果的には大和久の変遷観に近いものとなっている。

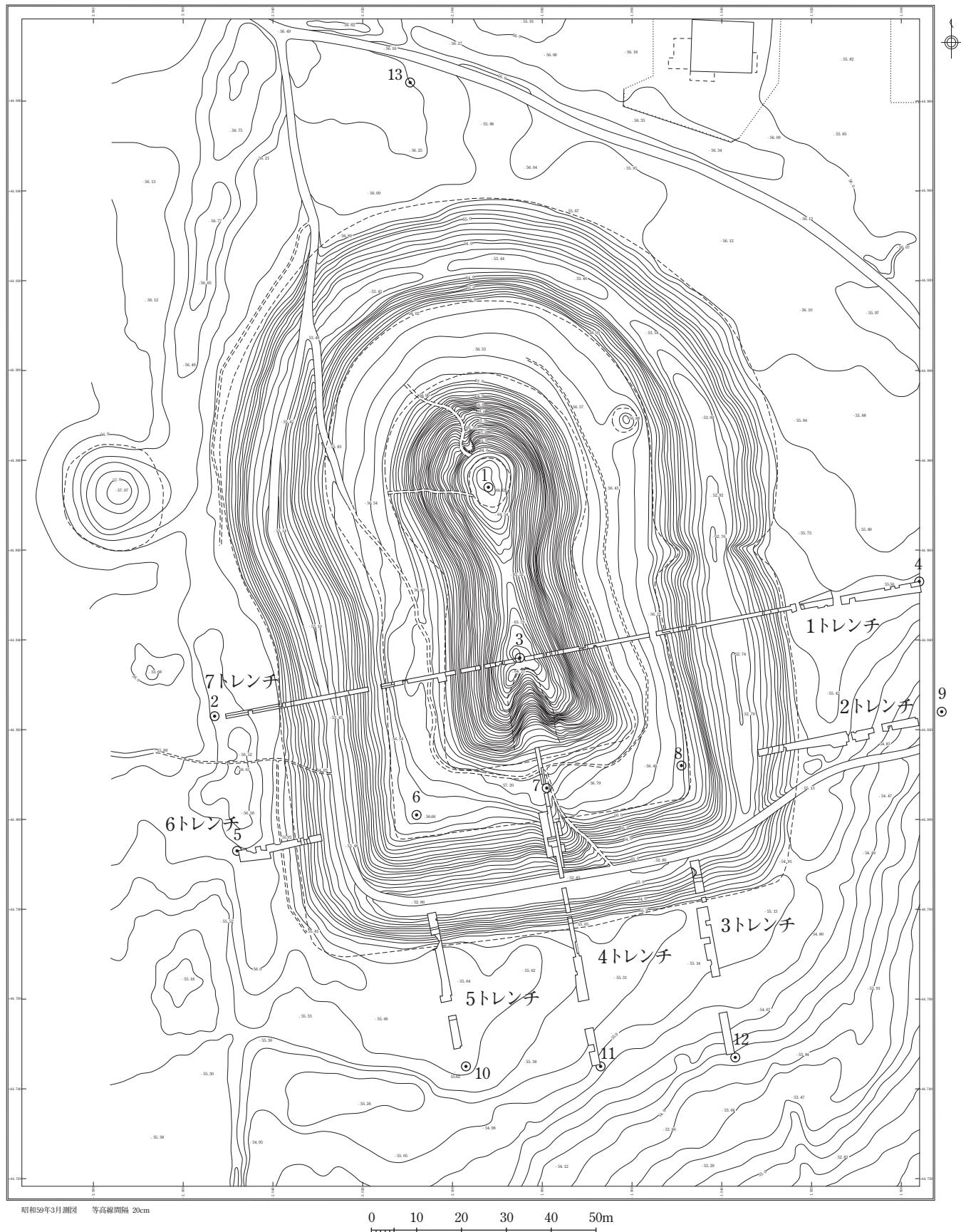
これらの論議を通して、吾妻古墳に対する遺構論的位置付けはともかく、年代論的位置付けは、琵琶塚古墳の後で埴輪消滅の前、6世紀中葉から後葉にほぼ固まったと言ってよい。

折しも、壬生町史編さん事業で、測量が行われ、栃木県史より詳細な実測図が公表された。それと共に、後円部墳丘第二段中位の円筒埴輪列の存在、先述の運び出された石材の報告といった新知見も記述されている（山ノ井 1987）。

栃木県史と壬生町史の計測値は、年月の経過や測量方法の違いによって違いが生じているが、どの部位を「全長」と見ているかに、墳丘に対する認識の違いが現れている（第2表）。先述の秋元・大橋の論考でも墳丘長と基壇長を併記することで古墳の規模を記述しているが、この問題は白石太一郎によって言及されている。白石は、栃木県の基壇が墳丘の一部で



あることから、盛り土の有無に関わらず、基壇の下端を墳丘長として計測することが望ましいことを主張した。栃木の地域性を認めた上でも、従来の計測方法では他地域との比較研究に齟齬をきたす原因になると苦言を呈している(白石他1990)。このような意見が出てきたのは、吾妻古墳の認知度が県内から全国へと広がった



第4図 吾妻古墳墳丘測量図 ($S = 1 : 1,200$) 平面図は壬生町提供

た証左とも言える。

白石の指摘の後、稻垣圭子や齋藤恒夫は、基壇の下端を墳丘長として全長134mと表記している(稻垣1997、斎藤2000)。以後、この数値が吾妻古墳の全長として定着していき、吾妻古墳が栃木県最大の古墳であるという認識が次第に広がった。実際、吾妻古墳の全長と表現される場合、第二段墳丘長や第一段平坦面(基壇)長が表記される場合が多かったので(第2表)、いずれもその規模の突出性に注意が払われることが少なかった。従来、栃木県最大の古墳は琵琶塚古墳、摩利支天塚古墳として認識されていたので、この変化は栃木県の古墳時代像に大きな影響を与えた。秋元陽光・齋藤恒夫は、栃木県の首長墳の変遷を論ずる中で、吾妻古墳で最大化することを指摘した。その後の様相として、多地域で首長墳が築かれるが規模の格差が見られなくなること、後期群集墳が各地に出現すること、下野型古墳の要素が各地域の中小古墳に取り入れられることから、国分寺地域の首長層の影響力が強く作用していることを想定しており(秋元・斎藤2001)、前述の大橋の論説を推し進めている。

沼沢豊は、それまで企画論において俎上にのぼることのなかった基壇のある古墳を、自身で開発した方法論によって、他の古墳の墳形と比較検討を試みている。その結果、企画論的にも基壇の下端を墳丘長ととらえるべきことを主張している。それまでも墳丘の企画論的研究は行われていたが、畿内の大型古墳を中心とした研究であり、それと対比できたのは琵琶塚古墳までであったが、基壇も他の古墳と共通する企画原理によって説明できることを示した。そして企画の変化から、茶臼山→壬生愛宕塚→吾妻という典型的な基壇古墳への道筋がたどれ、基壇の低平化やテラス幅の最大化によって吾妻→長塚という展開を示した(沼沢2004)。このことによって、吾妻古墳を基壇の中で最も典型的なものと見るという、従来の見解を追認したかたちになった。沼沢はここでは典型化を年代順に置き換えることをしていないが、基壇の典型化と前方部の発達度のどちらを優先させて年代を決定するかで、吾妻古墳の年代が変わることになる。吾妻古墳を最古の基壇を持つ古墳と位置付けると、その出現を画期的と見ることになり、最新と位置付けるとその出現は漸移的と見ることになる。

以上の研究成果からも、吾妻古墳の位置付けが栃木県だけでなく、関東はもちろん、全国的な古墳の位置付けの中で重要な位置を占めることが理解できる。

参考文献

- 碧山季美 1850 『壬生町領史略』
秋本陽光・大橋泰夫 1986 「思川流域 東国における首長墓の変遷一下野国を中心としてー」『第14回古代史サマーセミナー 栃木 研究報告資料』 古代史サマーセミナー事務局・栃木県考古学会
秋元陽光・大橋泰夫 1988 「栃木県南部の古墳時代後期の首長墓の動向ー思川・田川水系を中心としてー」『栃木県考古学会誌』第9集 栃木県考古学会
秋元陽光・齋藤恒夫 2001 「栃木県」『シンポジウム 中期古墳から後期古墳へ 発表要旨資料』第6回東北・関東前方後円墳研究会大会 東北・関東前方後円墳研究会
池上悟 1988 「野州石室考」『立正大学文学部論叢』第88号 立正大学文学部
稻垣圭子 1997 「吾妻古墳出土の埴輪」『考古回覧』第21号 秋元陽光代表
岩崎卓也 1984 「後期古墳が築かれるころ」『土曜考古』第9号 土曜考古学研究会
岩崎卓也・森田久男 1978 「小山市域の円筒埴輪」『小山市史研究』1 小山市史編さん委員会
上野恵司 1992 「下野・切石石室考」『立正考古』第31号 立正大学考古学研究会
大橋泰夫 1990 「下野における古墳時代後期の動向ー横穴式石室の分析を通してー」『古代』 第89号 早稲田大学考古学会
大和久震平 1972 「第五章古墳文化 第一節概観 一墳形(一) 前方後円墳・第二節古墳の分布と主要古墳 四姿川・思川流域 吾妻岩屋古墳」大和久震平・塙静夫『栃木県の考古学』吉川弘文館
大和久震平 1972 「古墳文化 飯塚埴輪窯跡」大和久震平・塙静夫『栃木県の考古学』吉川弘文館
斎藤恒夫 2000 「栃木県の前方後円墳ノート2ー御鷲山古墳の外形復元ー」『栃木県考古学会誌』第21集 栃木県考古学会
白石太一郎他 1990 「壬生車塚古墳の測量調査 関東の終末期大型方・円墳について」『関東地方における終末期古墳の研究』 平成元年度科学的研究費補助金(一般研究B) 研究成果報告書
沼沢豊 2004 「古墳築造企画の普遍性と地域色ー栃木県における基壇を有するとされる古墳をめぐってー」『古代』第114号 早稲田大学考古学会(2006『前方後円墳と帆立貝古墳』雄山閣に再録)
山越茂 1979 「吾妻岩屋古墳」『栃木県史 資料編考古二』 栃木県史編さん委員会
山ノ井清人 1987 「吾妻古墳」『壬生町史 資料編 原始古代・中世』 壬生町史編さん委員会

3. 調査の所見

最初に、後円部墳頂中心と前方部墳頂最高所中央を結んだラインを設定して、それを古墳主軸とした。平成19年度は、その主軸に平行、直交するトレンチを前方部を中心に設定して調査を行った。それらから読み取れる各部位の計測値は第3表の通りであるが、以下に各トレンチから読み取れる古墳の特徴を記す。

(1) 各トレンチの所見

1 トレンチ

周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状

を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部墳頂から東に向かうように設定した。周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側と内縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。埋没土量は少なく、中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは30cmである。周堀中央から内縁にかけて、底面から約10cm上位に浅間B軽石層の集中が層状に認められる。

周堀外縁は、下半分では急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。墳丘第一段斜面はその立ち上がりが周堀外縁に比べると緩やかで、旧地表土層の上に盛土層がある。

墳丘第一段（基壇）は、ローム層塊を土盛りして、墳丘第二段裾から墳丘第一段平坦面外縁にかけてほぼ水平に仕上げている。平坦面中央から外縁にかけて埴輪の出土はほとんどないが、墳丘第二段裾からは多量に埴輪が出土しており、埴輪列が存在した可能性が高い。

墳丘第二段斜面は黒土と鹿沼軽石層の塊を積み上げている様子が窺われる。7トレンチに比べて黒色土の割合が大きい。中位にも埴輪が集中して出土する平坦面があり、埴輪列や段築がある可能性がある。

墳頂平坦面は現地表から5cmくらいで、鹿沼軽石層の塊による盛土が確認できた。埴輪は出土したが原位置を保つものではない。出土した埴輪の大部分は円筒形であるが、形象埴輪もわずかに出土している。

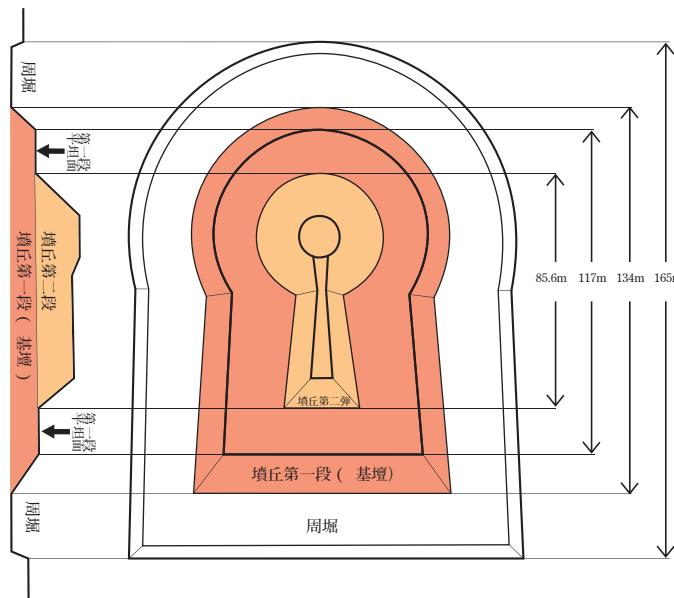
2 トレンチ

周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部墳頂から30m南、30m東の地点から東に向かうように設定した。周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一

第3表 各トレンチにおける計測値 (単位: m)

	1トレンチ	2トレンチ	3トレンチ	4トレンチ	5トレンチ	6トレンチ	7トレンチ
周堀上端幅	26.15		24.50			23.00	
周堀下端幅	17.10		13.20			11.75	
第一段平坦面幅	17.00					13.20	
周堀底面から周堀外縁までの高さ	2.90	2.50	1.70	2.75	2.60	2.60	2.80
周堀底面から第一段平坦面までの高さ	3.50			3.50			3.95
周堀底面から墳頂までの高さ	11.80		11.85			11.50	
周堀外縁と第一段平坦面の高低差	0.60		0.75			1.15	
第一段平坦面の盛土厚	0.25		0.40			0.75	
墳丘第二段裾から墳頂までの高低差	7.85					7.20	
現地表から周堀底面までの深さ	0.30	0.70	0.35	0.30	0.60	1.10	0.90



第5図 吾妻古墳墳丘模式図



写真3 1トレンチ周堀外確認状況（南東から）



写真4 1トレンチ周堀確認状況（西南から）



写真5 1トレンチ墳丘確認状況（南東から）



写真6 1トレンチ埴輪出土状況（西南から）

に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀外縁は下半分では急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。1・6・7トレンチと比較すると、周堀外縁が南へいくほど西に向かうことが窺える。遺物は周堀内から埴輪が数片、周堀外から縄文土器が一片発見されたのみである。

3 トレンチ

周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して平行するように、前方部墳頂から30m南、30m東の地点から南に向かうように設定した。周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀外縁は緩く立ち上がる。周堀底面と周堀外縁の高低差が最も小さい。このことは周囲の地形が東に向かって低く傾いていることによるものと考えられるが、周堀壁の傾斜の緩さや2トレンチでの周堀外縁の向かう方向を考慮すると、古墳築造時に前方部南東隅を浅くしようとする意図が働いたためとも考えられる。遺物は周堀内から埴輪が数片発見されたのみである。

4 トレンチ

周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸に対して平行するように、前方部墳頂から30m南の地点から南に向かうように設定した。周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。

この地区には、墳丘第一段平坦面から周堀内縁にかけて、丸く隆起した場所がある。一見、陸橋や造出に見えるが、この地区的北側にはかつて「岩屋（横穴式石室）」が存在し、石材が取り出されたと言われる地区があり、その部分は墳丘が大きくえぐり取られている。この隆起する地区はその際の流出土がたまつたものと予想されたため、それを確認するため、断ち割り調査を行った。

その結果、この地区では、ロームや鹿沼軽石層を主体とする土層が、他のトレンチで覆土と判断した土層の上にのっていることが確認され、隆起部分が形成されたのは、周堀が完全に埋没した後であることが判断できた。このような所見から、当初の予想通り、この隆起部分が古墳時代の施設ではないことが判明した。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側と墳丘第一段斜面側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀の埋没土量は少なく、中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは30cmである。周堀中央付近、底面から約10cm上

位に浅間B軽石層の細粒がわずかに認められる。

周堀外縁は、他のトレンチに比べて、緩く立ち上がる。墳丘第一段斜面の立ち上がりは緩やかで、旧地表土層の上に盛土層がある。

墳丘第一段（基壇）は、鹿沼軽石層、ローム層の順に塊を土盛りして、ほぼ水平に仕上げている。

周堀内、墳丘第一段から拳大の川原石、凝灰岩の破碎片、埴輪片、須恵器片、陶磁器片が出土した。川原石は拳大のものが多く、主体部の裏込めや前底部、敷石に使用されたものと考えられる。凝灰岩破碎片は小さいものが多いが、中には面取りの加工が分かるものも存在する。陶磁器片は遺構に伴わない。

5 トレンチ

周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して平行するように、前方部墳頂から30m南、30m西の地点から南に向かうように設定した。周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀外縁は下半分では急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。6・7トレンチと関連させて想定すると、前方部南西隅角が南東部隅角と違ってかなり深く掘削されていたことが窺える。遺物は周堀内から埴輪が数片発見されたのみである。

6 トレンチ

周堀の範囲及び周堀外の遺構の有無を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部墳頂から30m南、30m西の地点から南に向かうように設定した。周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかった。土手状に見える高まりの一部を断ち割り調査したが、高まりが見られるのは、最上層のみで、その下は黒色土からロームへの漸移層までほぼ自然堆積と見られる様相を呈しているため、古墳時代の遺構ではないと判断した。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。黒色土はこのトレンチ内での堆積が最も厚かった。周堀外縁は下半分では急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。今回調査した周堀内としては最も厚く覆土が堆積している。5・7トレンチと関連させて想定すると、前方部南西隅角が南東部隅角と違ってかなり深く掘削されていたことが窺える。遺物は周堀内から埴輪が数片発見されたのみである。



写真7 2トレンチ周堀確認状況（西から）



写真8 3トレンチ周堀確認状況（北南から）



写真9 4トレンチ周堀外確認状況（南から）



写真10 4トレンチ周堀確認状況（北から）



写真11 4トレンチ墳丘第一段～周掘確認状況（南から）



写真12 4トレンチ墳丘第一段土層断面（南西から）



写真13 5トレンチ周堀確認状況（北西から）



写真14 6トレンチ周堀確認状況（南東から）

7トレンチ

周堀外の遺構の有無及び墳丘・周堀の形状を確認するため、墳丘主軸に対して直交するように、前方部墳頂から西に向かう。周堀外には古墳に伴う遺構、遺物は認められなかつた。土手状に見える高まりの一部を断ち割り調査したが、高まりが見られるのが、最上層のみで、その下は黒色土からロームへの漸移層までほぼ自然堆積と見られる様相を呈しているため、古墳時代の遺構ではないと判断した。

周堀は鹿沼軽石層まで掘り込まれている。周堀の覆土は周堀外縁側と内縁側にロームを主体とする褐色土層が第一に埋没し、その上に周堀内全体を覆うように黒色土が、さらにその上に暗褐色土層が堆積する。周堀の埋没土量は、中央部分での現地表から周堀最底面までの深さは90cmである。

周堀外縁は下半分では急激に立ち上がるが、上半分で緩く傾斜する。墳丘第一段斜面はその立ち上がりが外縁に比べると緩やかで、旧地表土層の上に盛土層がある。

墳丘第一段（基壇）は、鹿沼軽石層、ローム層の順に塊を土盛りして、墳丘第二段裾から墳丘第一段平坦面外縁にかけてほぼ水平に仕上げている。中央から外縁にかけて埴輪の出土はほとんどないが、墳丘第二段裾からは多量に埴輪が出土しており、埴輪列が存在した可能性が高い。

墳丘第二段斜面は黒色土と鹿沼軽石層の塊を積み上げている様子が窺われる。1トレンチに比べて鹿沼軽石層の割合が大きい。中位にも埴輪が集中して出土する地点があり、埴輪列や平坦面がある可能性がある。

墳頂平坦面は現地表から5cmくらいで、鹿沼軽石層の塊による盛土が確認できた。埴輪は出土したが原位置を保つものではない。出土した埴輪の大部分は円筒形であるが、形象埴輪も少量出土している。

これらのトレンチで周堀から墳丘まで一連に確認調査できたのは、1トレンチと7トレンチの部分だけである。この部分から計測できた前方部の数値は次の通りである。墳丘第二段頂幅11.40m、墳丘第二段裾幅34.60m、墳丘第一段（基壇）上端幅64.80m、墳丘第一段（基壇）下端幅76.38m、周堀外縁幅113.95m。

（2）出土遺物

古墳時代の遺物は埴輪、須恵器が出土した。

古墳時代以外の遺物は縄文土器が周堀外から、墳丘表土上からは渡来銭、近世陶磁器が出土したが、いずれも遺構に伴うものではない。

埴輪

各トレンチから出土しているが、全形が窺えるものは少ない。最も大きいものは7トレンチから出土したものであ

る（写真20）。口縁はつまみ出したように外側に外反している。復元口径32.4cm、現存高47.5cmである。突帯は現状では3条であるが、接合資料から4条以上存在することが想定できる。突出度は高いが、幅は狭い。密着度が弱く、剥落したものが多い。最上段に波状の線刻がある。ハケメは横方向に施した後、その上に縦方向に施す。それとは別に口縁部には横方向に数段施す。内面にもハケメが施される。底部破片も存在するが、低位置突帯は確認できない。

形象埴輪は7トレンチで最も多く出土した。写真21はすべて7トレンチから出土したもので、同一個体の可能性が高い。線刻が平行する直線または鋸歯状に施されている。粘土帯が貼り付けられ、それに沿って赤色塗彩されているものが多い。写真上段3点は上面の縁が残存している。下段左2点は粘土粒が貼り付けられる。器材埴輪のうちの、鞍をかたどったものと考えられるが、破片のため断定はできない。

須恵器

4トレンチで数片の出土があるのみである。写真22は、いずれも大型甕形土器の破片で頸部と胴部である。

4.まとめ

今回の確認調査で明らかになったことを、以下に列記してまとめとしたい。

（1）墳形

周堀の問題

周堀は、現況でも非常に明瞭に視認できるが、調査の結果、それが古墳の原形を非常に良好な状態で保ったものであることが確認できた。それと共に、前方部側では周堀の外には古墳に伴う施設（周堤や二重、三重目の周堀）が認められないことも確認できた。埴輪の出土も周堀外では一片もない状況であり、埴輪の樹立もなかったと判断できる。

周堀内は覆土の堆積が非常に薄いことが確認できた。1・4トレンチ周堀底面から約10cm上位では浅間B軽石層と考えられるテフラを検出した。その降灰年代は天仁元年（1108年）とされており、古墳築造後にほとんど埋没が進行していない状況が窺われる。このことの説明は容易ではないが、墳丘の崩落が少ないことが要因の一つに挙げられる。崩落の少なさは特殊な墳形による墳丘の盛土の少なさと関連させることも可能であるが、埋没のメカニズムをさらに検討する必要がある。築造後の浚渫も考慮するべきだが、その証拠となるものが現状では確認できない。周堀外でも黒色土層が広く確認されているが、周堀内の黒色土と同一層に相当するかどうかは、テフラの同定とともに理化学分析の結果を待ちたい。



写真15 7トレンチ周堀外確認状況（南東から）



写真16 7トレンチ周堀確認状況（東から）



写真17 7トレンチ墳丘確認状況（西から）



写真18 7トレンチ墳丘第一段平坦面土層断面（南から）



写真19 7トレンチ埴輪出土状況（西から）



写真20 7トレンチ出土円筒埴輪上半部



写真21 7トレンチ出土形象埴輪



写真22 4トレンチ出土須恵器

4トレンチでは周堀につながるような前庭部の落ち込みは確認できなかった。このことは桃花原古墳で確認されたような前庭部が存在しないことを示している。

墳丘における基壇の問題

栃木県の古墳の墳形の特異性は、基壇という言葉と共に認識されていたが、その発掘による確認例は少なかった。長塚古墳では墳丘第一段（基壇）平坦面に扁平な川原石が敷かれている。川原石の敷設によって墳丘第一段（基壇）を積極的に造作していることが分かるが、墳丘第一段（基壇）上の盛り土の状況が明確でなかった。桃花原古墳では墳丘第一段（基壇）平坦面の盛り土は、厚さ平均20cmで中央のみに存在し、落ち際には明確な盛り土は存在しないとされている。富士山古墳では墳丘第一段（基壇）平坦面の盛り土が確認されているが全面にわたって確認されたわけではない。

従来、吾妻古墳の基壇は周囲とほとんど同じ高さなので、盛り土はほとんどないと認識されていたが、今回実測した結果、僅かではあるが、墳丘第一段（基壇）が周堀外より高いことが判明した。そしてその部分に盛土が施されていることが確認できた。このことは低いとはいえ、基壇面も墳丘の一部とみるべきという最近の研究動向の正しさを補強するもので、墳丘長を134mとみる計測方法の妥当性を示したと言うことができる。今後、後円部側の墳端を検出することによって、さらに正確な数値を得ることが期待できる。

墳丘第二段の問題

墳頂から斜面の埴輪が集中する地点において、やや平坦な面を成す状況が確認できた。このことから、墳丘第一段（基壇）を含めて三段以上の段築を想定することが可能である。ただ、1トレンチと7トレンチでは平坦面の位置が異なっており、平坦面が墳丘全体に巡るかどうかを確認することが今後の課題である。

埴輪列の問題

今回の埴輪の出土量は、トレンチ調査という限界を差し引いても、多いとは言えない状況にある。古墳の規模を考えるなら、予想外の觀がある。富士山古墳、甲塚古墳では埴輪列が墳丘第一段平坦面中央に巡っていたが、吾妻古墳では墳丘二段目裾に埴輪列の存在が想定される点が、これまでの基壇上の埴輪列のあり方と異なっている。壬生町史によると、墳丘中位に埴輪列が存在することが指摘されており、墳頂からも埴輪の出土が見られる。今回の調査でも墳丘斜面に埴輪が集中して出土する地点があり、壬生町史と同じ状況を確認できた。これらの状況から窺われる埴輪

配列を、限定的と見るべきか集中的と見るべきかを今後確認していく必要がある。

(2) 遺物

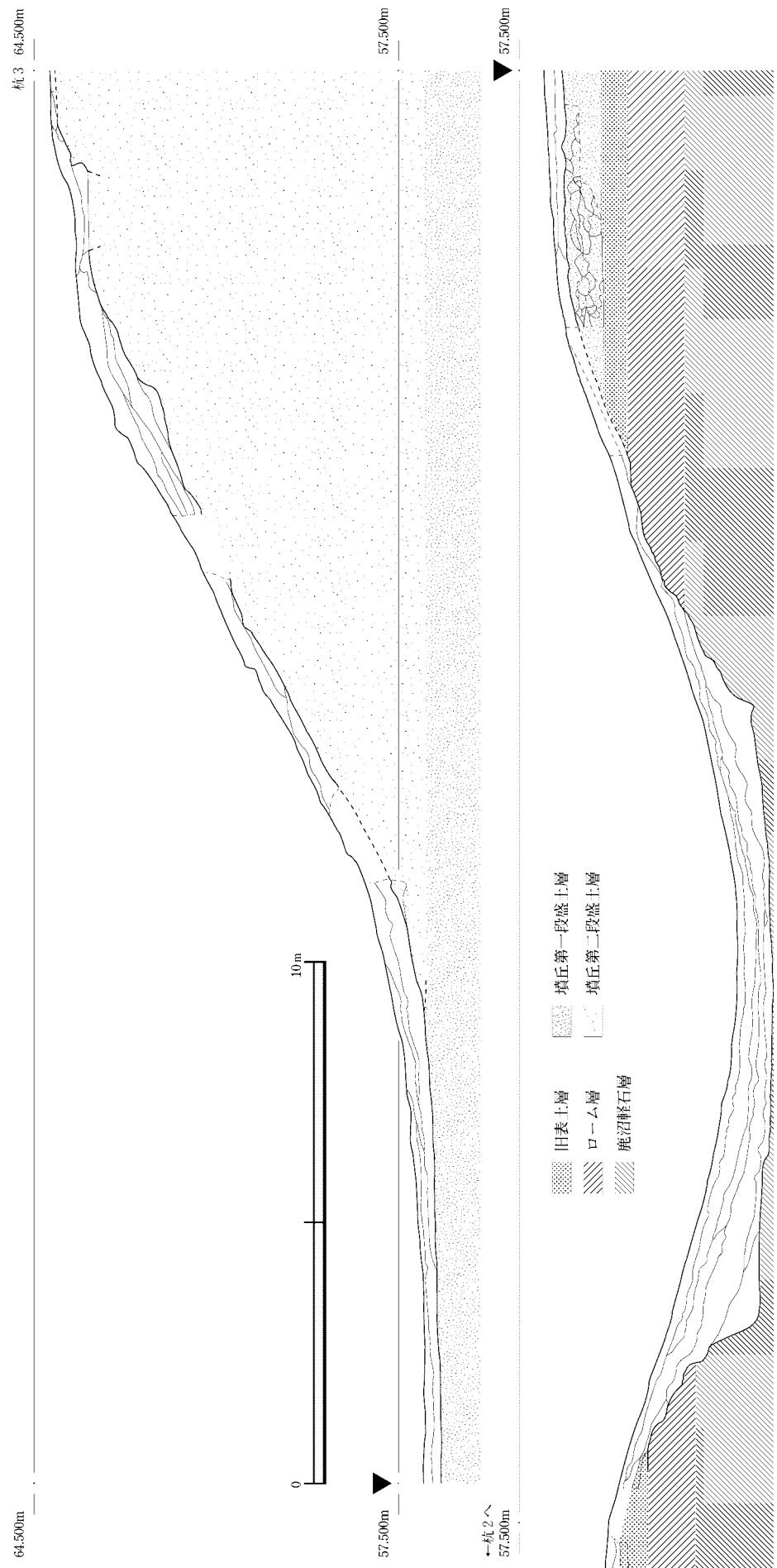
埴輪の問題

吾妻古墳の埴輪の特徴は、分厚く、ハケメが細かいことである。他の古墳では見られないこと、飯塚埴輪窯跡出土埴輪との類似性が指摘されていた。

今回の調査で出土した埴輪にも同様の特徴が見られるが、新たに知られた特徴もいくつか挙げられる。つまり出した口縁端部、波状の線刻である。口縁端部の特徴は同時期の他の古墳ではあまり見られない特徴である。類似した埴輪としては大阪府日置荘遺跡のMT 85型式併行期の例が挙げられるが、系譜的関連を求めるにはさらに検討が必要である。波状の線刻は、鹿沼市下台原古墳で内面に施した例が見られるが、類例は多くない。前代までの大型古墳に多くみられる「塚山系」埴輪との比較検討が必要である。また、形象埴輪の発見も従来知られていなかった所見であり、その配列の追求も今後の課題である。

須恵器の問題

今回の調査で須恵器の出土量は僅少で、土師器は確実なものが全く確認できなかった。通常、土器類が多く出土する、石室前面に相当する4トレンチでもこのような状況であることは、周堀からつづく前庭部が確認できないこととも関連して、墳丘第一段(基壇)上での埋葬儀礼を考える上で注意すべき様相である。



第6図 7トレンチ墳丘・周堀断面図 ($S = 1 : 120$)

報告書抄録

ふりがな	あづまこふん
書名	吾妻古墳
副書名	重要遺跡範囲確認調査概報
巻次	I
シリーズ名	栃木県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第314集
編著者名	中村享史・宮田宜浩
編集機関	財団法人とちぎ生涯学習文化財団 埋蔵文化財センター
所在地	〒329-0418 栃木県下野市紫474番地 TEL0285-44-8441
発行機関	栃木県教育委員会 財団法人とちぎ生涯学習文化財団
発行年月日	西暦 2008年3月28日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あづま こふん 吾妻古墳	とちぎし 栃木市 だいこうじまち 大光寺町	09203	3938	33° 00' 00"	129° 30' 00"	20070402– 20080328	1,040m ²	重要遺跡 範囲調査
	あざあづま 字吾妻 しもつがぐん 下都賀郡 みぶまち 壬生町 ふじい 藤井 あざあづまはら 字吾妻原	09361	5980-42					

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吾妻古墳	古墳	古墳	古墳 1基	須恵器、埴輪	<ul style="list-style-type: none"> ・前方後円墳 ・幅の広い墳丘第一段平坦面(基壇)を持つ ・凝灰岩切石の横穴式石室

要約	吾妻古墳は墳丘全長134m、周堀外縁長165mの栃木県最大の前方後円墳である。墳丘第一段平坦面(基壇)は幅が広く低いが、盛り土が施されている。墳丘第二段頂上と中位、裾から埴輪が出土している。凝灰岩切石の横穴式石室を有する。
----	---

栃木県埋蔵文化財調査報告第314集

国指定史跡

吾妻古墳

一重要遺跡範囲確認調査概報 I 一

発行 栃木県教育委員会

宇都宮市塙田1-1-20

TEL028(623)3424

財団法人とちぎ生涯学習文化財団

宇都宮市本町1-8

TEL028(643)1011

平成20年3月28日発行

編集 財団法人とちぎ生涯学習文化財団

埋蔵文化財センター

下野市紫474番地

TEL0285(44)8441

印刷 株式会社松井ピ・テ・オ・印刷